ラスト20分。感動で、あなたはもう席を立てない！

★（刑務所を舞台にした）近年最高のフランス映画！
――――（フィガロ紙）

★非の打ちどころどころのない、完璧な作品。
――――（パリマッチ誌）

カンヌを笑いと涙で包んで― フランス映画の歴史に新たな名作の誕生！
この映画はスウェーデンの実話をベースに映画化された！

囚人たちの為に演技のワークショップの講師として招かれたのは、決して順風満帆とは言えない人生を歩んできた崖っぷち役者のエチエンヌ。
彼は不条理劇で有名なサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』を演目と決めて、訳ワケあり、クセありの囚人たちと向き合うことに。
しかしエチエンヌの情熱は次第に囚人たち、刑務所の管理者たちの心を動かすこととなり、難関だった刑務所の外での公演を実現するまでに。
ただ思いも寄らぬ行動を取る囚人たちとエチエンヌの関係は常に危うく、今にも爆発しそうでハラハラドキドキの連続。
その爆弾は、舞台の上でもいつ着火するかわからない。
ところが彼らのその危なげな芝居は、むしろ観客や批評家からは予想外の高評価を受けて、再演に次ぐ再演を重ねる大成功！
そして遂にはあのフランス随一の大劇場、パリ・オデオン座から最終公演のオファーが届く！！
果たして彼らの最終公演は、観衆の喝采の中で、感動のフィナーレを迎えることができるのだろうか？

『マドモワゼル』や『灯台守の恋』などの名脚本家としても知られるエマニュエル・クールコルの監督第三作である本作は、
コロナ禍の2020年カンヌ国際映画祭オフィシャルセレクションに選出され、その後フランスの度重なるロックダウンを経て2021年9月に
ようやく劇場公開されると、ボックスオフィス初登場第二位のスマッシュヒットを記録。フランス国中を感動と熱狂の渦に巻き込んだ。
本作は、スウェーデンの俳優ヤン・ヨンソンが1985年に体験した実話をベースにしている。
撮影されたのも、フランスに実在する刑務所の協力の元に行われている。

2020年ヨーロッパ映画賞 ヨーロピアンコメディ作品賞受賞
2021年アートフィルムフェスティバル 最優秀観客賞受賞
2021年ラボール 映画と映画音楽祭金のイビス（映画音楽）賞受賞
2021年カナダ・ヴィクトリア映画祭 観客賞受賞
2021年フランス映画祭 横浜オフィシャルセレクション

カンヌ国際映画祭2020
オフィシャルセレクション

UN TRIOMPHE
アプローズ、アプローズ！
囚人たちの大舞台

監督：エマニュエル・クールコル
主演：カド・メラッド（コーラス）（オーケストラ・クラス） マリナ・ハンズ（世界にひとつの金メダル）/ ロラン・ストッカー（セザンヌと過ごした時間）
主題歌："I Wish Knew How It Would Feel to Be Free" ニーナ・シモン
［2020年フランス映画 | 105分 | フランス語 | 字幕翻訳：横井和子 | シネマスコープ 2.29:1 | 5.1ch | DCP・Blu-ray］
配給：リアリーライクフィルムズ + インプレオ

Twitter @applause_movie　Facebook https://onl.sc/AEKfpAW　Instgram reallylikefilms　www.reallylikefilms.com/applause

＼7月29日（金）より、感涙のロードショー！／
――――特製ポストカード付ムビチケ（1,500円・税込）発売中！――――

予想外のラストが、あなたを待っている。

AGAT FILMS & CIE
PRESENTS

カンヌ国際映画祭2020
オフィシャルセレクション

舞台の上だけが、俺たちの自由（フリーダム）！

UN TRIOMPHE
アプローズ、アプローズ！
囚人たちの大舞台

エマニュエル・クールコル監督作品
［マドモワゼル］［灯台守の恋］の名脚本家、長編第三作

カド・メラッド 主演（［コーラス］［オーケストラ・クラス］）

ダヴィッド・アヤラ　ラミネ・シソコ　ソフィアン・カーム　ピエール・ロッタン　ワビレ・ナビエ　アレクサンドル・メドヴェージェフ　サイド・ベンシナファ　マリナ・ハンズ　ロラン・ストッカー

売れない役者を演出家に迎え、ワケありクセあり囚人たちの舞台が批評家・メディアから大絶賛！実話をもとにした驚きの物語。

字幕翻訳：横井和子　宣伝デザイン：内田美由紀(NORA DESIGN)　予告編監督：渡山慎二（RESTA FILMS）　宣伝：ムービー・アクト・プロジェクト　関西地区配給・宣伝：キノ・キネマ　［ 2020年フランス映画 | 105分 | フランス語 | シネマスコープ 2.29:1 | 5.1ch | DCP・Blu-ray ］
配給：リアリーライクフィルムズ + インプレオ　後援：在日フランス大使館 + アンスティチュ・フランセ日本 / UNIFRANCE

ReallyLikeFilms　IMPLEO　UNIFRANCE　www.reallylikefilms.com/applause　映倫 PG12

©2020 - AGAT Films & Cie – Les Productions du Chômi / ReallyLikeFilms

全ての人に届けたい —各界の著名人から寄せられた感動メッセージ!

この映画の題材は、**かつて世界中の演劇界で話題になった実際の事件**だ。
僕もそのことに刺激を受け、かつて緒形拳さんらと全国ツアーをした
『ゴドーを待ちながら』は網走の刑務所でも上演した。
この映画はさらに刺激的だ!

串田和美さん（俳優・演出家・舞台美術家）

『ゴドーを待ちながら』という戯曲は、本当にやっかいで、
それを六カ月で服役囚が劇場で上演するというだけで大冒険なのに、
次々とすさまじいことが起こり、
**これが実話だって言うんですから、
まったくもう、言葉を失います。
ガツーンとやられました。**

鴻上尚史さん（作家・演出家）

「囚人たちが演劇の公演をする」。
その設定自体は「へえ」ってなもんだった。
俄然興味が湧いたのは、彼らの演じた演目が
『ゴドーを待ちながら』だったからだ。実話だという。
よくある奮闘記ではなく、感動的な映画だった。
かつて演劇の先輩が網走の刑務所で
『ゴドー待ち』を上演して、囚人たちにバカ受けだった。
彼らがこの演目に惹かれる理由を、今も考えている。

ケラリーノ・サンドロヴィッチさん
（劇作家・演出家・音楽家）

演劇は人の心を解放させる。
他者を意識して初めて自分は存在する。
**自分の存在を認められてこそ
私たちは生きることができる。**
生きるために必要なものを演劇を通して静かに教えてくれる。

白井晃さん（演出家・俳優）

「ゴドー」を演じたことのある人には勿論、
「ゴドー」を観たことのある人にも、ある種の共感と
思わぬ感動が届く映画だとは思いますが、この映画は
**「ゴドー」を知らない人にこそ
観て頂きたい映画**だと感じました。

斎藤歩さん（俳優・公益財団法人北海道演劇財団理事長）

自由を謳歌していると思っていた私より、囚人である彼らの方が、
よっぽど精神は自由だった。それを教えてくれた
**『唖然のラスト』20分に、
私はしたたかに打ちのめされた。**
私はゴドーを待つことさえしていなかったのだ……。

池田鉄洋さん（俳優・演出・脚本家）

緊張感と臨場感がある場面の中でもユーモラスな台詞の応酬が
さりげなく心地よかったです。歩んできたことは決して消えず、
歩んでいく先だけが見えない曖昧な人生のなかで
人と人が交差する瞬間がこうも尊くて可笑しくて、
いろんなことが仕方がないのかと、
悲観的ではなく、すとんと腑に落ちるように思えました。
**圧巻のラストシーンは凄まじく、
飾り気のない本当に素晴らしい一本でした。**

ヒコロヒーさん（お笑い芸人）

映画の中での劇、つまり劇中劇は難しい。
自分が演じるキャラクターが、また別の人格を演じる事で、
芝居が何重にも複雑化するからだ。
そのバランスが巧みなのは、監督自身が俳優で、
その難しさを承知しているからに他ならない。
**監督の舞台に対する愛情、俳優に対する愛情が感じられ、
ラストのオデオンでの公演は涙がこぼれた。**

オダギリジョーさん（俳優）

寓話で語られる人生の不条理は、何度も謙虚にその断りを立てながら、
生きることを肯定しようとしていた。過去に対する反省から思う、
未来への期待は常に寓話に込められ、未来永劫、
不条理を生きろと励ましているように思えた。
**生徒たち、囚人たちのそこに存在する美しさ、
劇中劇の中で彼らは圧倒的に輝いていた。**

渡辺真起子さん（俳優）

実話を元にした映画は楽しめないことがよくある。
説明的になるからだろう。前半はそんな予感もしていた。
しかし、しかし・・・。最後は
**俳優として最高の舞台とは例えば
このことを言うのだなと羨ましくも感涙しました。**

古舘寛治さん（俳優）

これは**ヒューマンドラマの皮を被った
心理サスペンス、心理スリラー**ですよ!
あー、ハラハラした、あー、怖かった。

伊勢志摩さん（俳優）

「囚人たちの演劇が評判となり、彼らも社会も変化してハッピーエンド」
という凡庸な紋切り型とは全く違う、
**自由とは何か?! という、この世相だからこそ
重要な問題を突きつけてくる作品。**
彼らが演じるベケットの『ゴドーを待ちながら』の存在が、
刑務所で「待つ」という意識に支配される囚人たちと
オーバーラップする作劇の上手さ。
演劇ファンに観ていただきたい!

湯山玲子さん（著述家・プロデューサー）

キャスティングのバラバラ感がフランス的な囚人たちが、
意味を理解しないまま話すセリフのひとつひとつの言葉が、
現実味を持って胸におさまっていく不思議さ。
**自分には無縁の戯曲と遠ざけていたのを後悔し、
繰り返し上演される名作のわけを実感**した。
しかも事実がベースになっているとは。
これを納得させてくれるのこそ、映画の力。

原由美子さん（ファッションディレクター）

ここに登場する『ゴドーを待ちながら』という傑作舞台が、
不条理劇ながら何故にこんなにも愛されるのか?
**「待つ」人生、そんなに捨てたものではない——
心が解放されるまさにその瞬間を、
この映画はもたらしてくれる!**

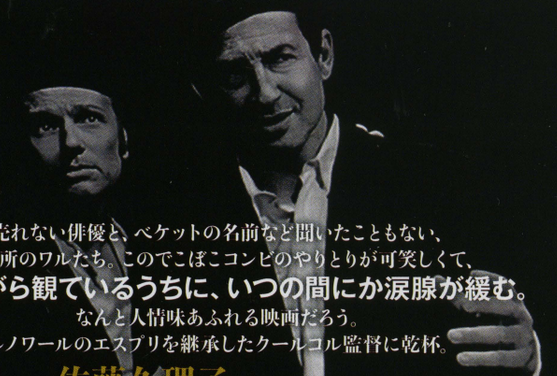
立石和浩さん（劇場プロデューサー）

絶望のどん底に、運命を逆転させるチャンス!
あたたかい希望を観客に運ぶ『アプローズ、アプローズ!』は、
社会の厳しさも突きつける。
囚人たちが演じるベケット作『ゴドーを待ちながら』は、
普遍的な人生の悲喜劇として深く味わえる。

桂真菜さん（舞踊・演劇評論家、国際演劇評論家協会）

名脚本家、エマニュエル・クールコル監督の最新作『アプローズ、アプローズ』。
くすぶった崖っぷち演出家の元に舞い込んだのは、
囚人たちに演技を教えるワークショップだった。
**舞台の上でだけ自由を噛み締める
囚人たちの演技が堪らなく胸を打つ、**
ラスト20分で一気に感動が押し寄せるフランス刑務所映画の最高峰。

フミヤさん（映画監督）



売れない俳優と、ベケットの名前など聞いたこともない、
刑務所のワルたち。このでこぼこコンビのやりとりが可笑しくて、
笑いながら観ているうちに、いつの間にか涙腺が緩む。
なんと人情味あふれる映画だろう。
ルノワールのエスプリを継承したクールコル監督に乾杯。

佐藤久理子さん（文化ジャーナリスト）

**最も感動的な瞬間は、
いつも想定外のところからやってくる。**
これぞ、名戯曲家も脚本家も書けないであろう、エキサイティングなストーリー。
たとえ辿り着く先が違ったとしても、情熱のあるところに必ず物語は生まれる。

立田敦子さん（映画ジャーナリスト）

ゴドーを待つように、何かを待ち続ける囚人たち。
演劇を通して、彼らに心の翼を授けるつもりが、
自らを羽ばたかせることになる売れない俳優。
**そして思いもよらぬ結末。
ベケットの笑みが見えるようだ。**
カンヌの大スクリーンに凱旋するさまを観たかった!

石津文子さん（映画評論家）

楽観的な「囚人の再生物語」と思っていると、足元をすくわれる。
これは喜劇なのか、悲劇なのか。或いは不条理劇なのか。そして、誰にとって?
**驚くべき実話は現代劇に変換され、
いまを生きる人々を惑わせる。**

SYOさん（物書き）

「服役囚が演劇で大活躍!」というキャッチーな設定から
「そんな展開あり!?」と思わせるのに、まさかの実話!
そこから劇中で題材となる有名不条理劇
『ゴドーを待ちながら』の新たな視点と解釈を提示され、
喜劇と悲劇をブン回してくる感動!?の作品です!

しんのすけさん（映画感想TikTokクリエイター）

私も人生という名の大舞台に立っていることを自覚できた、
人間の可能性と尊厳に触れるギフトのような映画でした。
自分を諦めず、誰のことも諦めず、挑戦を続けたその先に何が待つのか。
実話に基づいた、その真実に救われた。

東紗友美さん（映画ソムリエ）

演技に没頭することで誰かになれる。
しかし、仮面の隙間からは内面が染み出しているのだ。
情熱掻き立てる囚人たちのエキスは、仮面かぶらぬ者を揺さぶり動かす。
傍観者を虚構の共犯者に誘う魔力がそこにあった。

Che Bunbunさん（映画ライター）